

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：30108

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24600017

研究課題名(和文) 北海道における二世世代への調査を通じた自然体験活動の波及効果の検証

研究課題名(英文) Investigation of children's nature activities' spin-off effects to their parents, a study in Hokkaido

研究代表者

椎野 亜紀夫 (SHIINO, Akio)

北海道科学大学・工学部・教授

研究者番号：00364240

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、こどもの自然体験活動が親の余暇活動の充実等に影響を与えているのではないかと仮説のもと、二世世代への調査を通じてこどもの自然体験活動が親にどのような影響を与えたのかについて検証を試みた。研究の結果、調査対象事例のいずれにおいても子どもの自然体験活動が保護者の自然に関する知識の涵養、家庭でのレクリエーション活動の活性化等に一定の波及効果をもたらしていることが明らかとなった。このような保護者への波及効果は、家族でのレクリエーション活動の向上等につながりうることから、今後の自然体験活動の発展には保護者の興味・関心を喚起するプログラムの充実が必要とされているのではないかと考えられた。

研究成果の概要(英文)：This paper aimed at clarifying the children's activities in nature and its spin-off effects to their parents, by means of surveying two generations such as children and their parents, from the both sides of their physical and mental effects. As a result, through the analysis of three case studies, all of the children's activities in nature showed certain spin-off effects to their parents, such as cultivating parents' knowledge of nature and developing the family's outdoor activities. Based on this consideration, it is required to evoking parents' interests and curiosity of the nature activity programs which their children participating, for the purpose of progressing the future nature activities.

研究分野：造園学

キーワード：自然体験 子ども 保護者 波及効果

1. 研究開始当初の背景

生物多様性国家戦略 2010 (環境省) においては、都市部の「居住地周辺において身近な自然とのふれあいを求めるニーズは急速に高まりつつ」ある一方で、「生活圏に緑地が少なく、生物多様性に乏しいことを背景に、自然との付き合い方を知らない子どもたちやそれを教えることのできない大人たちも増えて」いる点が指摘されており、都市化の影響で自然を対象とした遊びが子世代、孫世代に引き継がれていないことが示唆されている。幼少期、児童期の自然体験をいかに豊かなものにしていくのかは成人への健全な成長にきわめて重要な課題であり、その場と機会を最大限整えていく必要がある。北海道は森林をはじめとする自然資源を豊富に有する地域であるが、都市住民 (特に子育て世代) は自然を対象としたレジャー、レクリエーション活動を積極的に行ってはいないものの、その多くはマイカーを移動手段としてリゾート地域、自然公園、キャンプ場等を利用が多く、市街地近郊に豊かな自然環境を有していながらも自然観察、環境学習、レクリエーション活動等の場としてこれらの身近な自然資源を十分活用できていないという実態がある。

2. 研究の目的

本研究は、こどもの自然体験活動がこどもの成長を促すに留まらず、親の余暇活動の充実や地域での人的交流の促進にも影響を与えているのではないかという仮説のもと、二世帯 (子世代 (幼児・児童) とその親世代) へのインタビュー調査、アンケート調査を通じて、こどもの自然体験活動への興味・関心やこれまでに体験した活動、活動をはじめに至ったきっかけ、活動参加後の他の活動への変化 (新たな活動をはじめようになった、新たな人的交流が生まれた等) について明らかにする。こどもの自然体験活動が親にどのような影響を与えたのか (こどもと一緒に活動に参加するようになった、親子でのアウトドア活動を行うようになった、新しい交友関係が生まれた、等) について意識面、行動面の両面から検証を試みる。

3. 研究の方法

札幌市内において自然体験活動を展開している市民団体の活動視察、団体代表者へのインタビュー調査を行い、活動内容や参加者属性等に関する概況を把握した。北海道内においてこどもを対象とした先進的な自然体験活動を実施している複数の団体を抽出し、活動状況の視察および代表者へのインタビュー調査を実施する。これらの団体の協力のもと、参加児童の保護者を対象としたアンケート調査を実施した。本研究においては幼児を対象とした自然幼稚園を運営する団体 (子どもの森ポラーノ、札幌市)、高学年児童を主な対象とした自然観察を行う任意団体 (手

稲アウトドア・クラブ、札幌市) ならびに児童、保護者を対象とした自然体験活動を展開している NPO 法人 (モモンガくらぶ、登別市) の 3 団体を対象に調査を行った。それぞれの団体の活動実態を把握した上で、こどもの活動参加をきっかけとした保護者への波及効果についてアンケート調査結果の集計・分析を行い、解明を試みた。

4. 研究成果

(1) 「子どもの森ポラーノ」の分析結果

札幌市近郊の自然幼稚園の一つである子どもの森ポラーノを対象として、自然幼稚園の活動実態について具体的に明らかにすること、自然幼稚園における活動がこどもの成長および保護者の意識や行動に及ぼす効果 (以下、波及効果とする) を明らかにすること、の 2 点を目的に研究を行った。研究対象地とした子どもの森ポラーノは札幌市西区の郊外の里山地域に位置する認可外の幼稚園であり、屋外での自然観察、自然体験活動を中心とした教育実践を行っている (図 - 1)。自然幼稚園の活動によるこどもの成長、およびこどもが自然幼稚園に所属することによる保護者への波及効果 (家庭生活の変化等) を検証するため、在園児保護者を対象にアンケート調査を行った。子どもの森ポラーノに所属する幼児の保護者世帯 (全 23 世帯) を対象に実施し、23 世帯中 22 世帯から有効回答を得た (有効回答率 95.7%)。こどもが自然幼稚園に通うようになってからの保護者の意識や家庭生活の変化について分析した結果、「親の自然に対する気づき」として「身近な場所に山菜や木の実があると気づいた」が 15 件見られ、こどもを通じて食べられる草や実に関する知識・体験を得ていることが明らかとなった (図 - 2)。また「自然の中で遊ぶ楽しさに改めて気づいた」が 13 件、「都市近郊の自然環境の豊かさを再認識した」が 10 件見られるなど、こどもを介して自然環境の豊かさや自然環境と関わりを持つことの魅力を再発見している保護者が多く見られた。また家族の生活変化では、「こどもと一緒にアウトドアに出かける機会が増えた」が 6 件、「動植物のことについて一

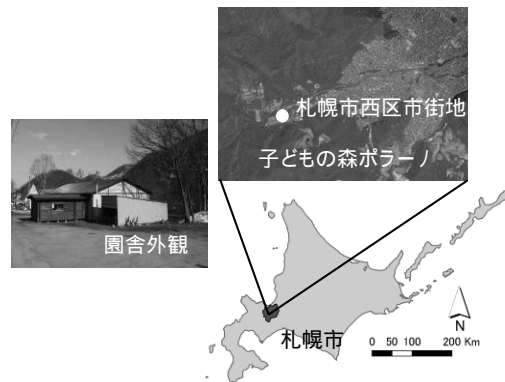


図 - 1 研究対象の位置

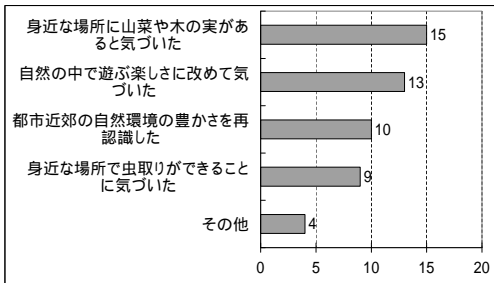


図 - 2 親の自然に対する気づき (複数回答)

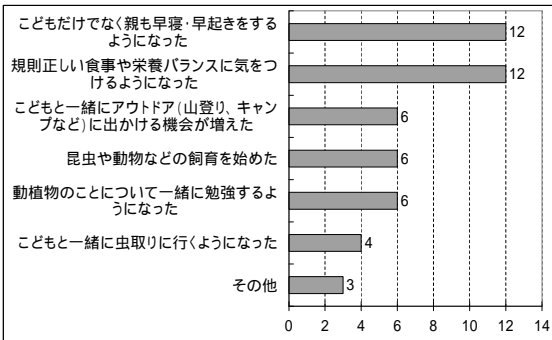


図 - 3 家族の生活変化 (複数回答)

緒に勉強するようになった」が6件見られるなど、自然幼稚園に通うことによる子どもの興味対象の変化が、家族での外出機会や親子での環境学習を促している効果をもたらしていることが明らかとなった(図-3)。さらに自然幼稚園に通うことで保護者同士の新たなつきあいが生まれ、「保護者同士でよく話をするようになった」が20件、「保護者同士で挨拶をするようになった」が17件見られた一方で、さらに「子ども連れで自宅に遊びに行くようになった」が13件、「保護者同士と一緒に外出するようになった」が12件

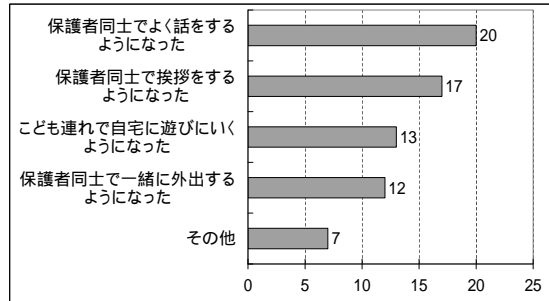


図 - 4 保護者同士のつきあい (複数回答)

見られるなど、保護者同士でのプライベートなつきあいや余暇活動にも波及していることが明らかとなった(図-4)。

さらにアンケート調査の自由記述回答から、子どもの森ポラーノに子どもを預けることによる波及効果に関する記述を抽出・整理した結果、表-1に示したような成果が得られた。波及効果として「意識形成」、「行為発生」、「能力向上」の3項目に分け、記述内容から確認された内容を併記するとともに、影響の関連(主体・客体の関連)も確認できたものについてその関連を示した。「自然と関わる子育ての重要性」に関わる記述内容では、「幼児期に自然の厳しさ、優しさに触れて、体が出来てくると、小学生になった時の集中力、忍耐力は、違ってくる実感している」といった意識形成のほか、このような自然と関わる体の発達という視点で育児ができるようになったといった能力向上に関する記述が見られた。また「自然資源の活用」に関する記述内容からは「四季の動植物の知識がついた」などの能力向上、「山菜やキノコ採りに行くようになった」といった行為発生への波及効果が見られた。なお影響の関連(主

表 - 1 活動を通じた子どもの成長、保護者の意識・行動に及ぼす効果

分類	自由記述内容(保護者へのアンケート調査結果から)	A波及効果			B影響の関連		
		A意識形成	A行為発生	A能力向上	B親子	B先生親	B保護者親
食への配慮	食に気をつけるようになりました。 <u>お弁当に既製品を使わないように意識があった(B)</u> ので、次第に 栄養バランス、手作り心を練るようになった(A) 。 食生活に気をつけるようになった(A) 。 毎日のお弁当作りなど自分には無理なのではないかと思っていました。家族全体の食事のバランスがどりやすい事や自分自身の食生活の手間が抜け、料理を手早くできるように。主婦として少し 腕前が上がった(A) ように思っています。 先生や先輩さんからのアドバイス(B) で食生活が入園前とかなり変わりました。 質のものを食べたり手作りでもそつやつけものを作ったりと今まで以上に頑張りました(A) 。 ポラーノは毎日「おべんどう」ですが、 毎週の作ったおべんどうを毎日食べ慣れた子供は安定感が違う(A) と思います。今でも既製のものを嫌います。						
自然と関わる子育ての重要性	体の発達は土やでこぼこ自然を歩いたり走ったり、そーつとつたりすることで育ちます。 そのような視点で育児ができるようになった(A) ことが親の成長だと思えます。 幼児期に 自然の厳しさ、優しさに触れて、体が出来てくると、小学生になった時の集中力、忍耐力は、違ってくる実感(A) しています。親も子ども沢山のことを学んでいます。 長男は4年生ですが、 ポラーノで保育していただいたおかげで、人間としての優の部分が大きく育っていると感じます(A) 。少々のことぐりけることなく集中力もあります。毎日の山登り、外遊び、冬の戻すべりなどで養った何に對しても集中できる体を育てていただきました。 私は、家庭(特に都市)では、絶対に日々味わわせることのできない、 自然の中で体を動かす、自由に自分で考え感じる毎日の子供に自立の心を育えたと感じています(A) 。もちろん、私立の幼稚園より親は大変ですが、それが手塚にかけて子育てすることだと思います。						
自然資源の活用	洗濯物や毎日の弁当など手間のかかる幼稚園ではありませんが、 日々の活動で磨かれる足元の強さ、また友人たちとのけんかや盛り合いたり力ししたりできる心の発達には何かの園(長男は他園卒です)では磨かれられないのではと実感(A) しています。 子供が特に 幼稚園に自然の中で遊び遊びと生活することには心の成長にも体の成長にもとても重要なこと(A) だと思っています。自然はいろいろな恵みを与えてくれますが、時にはうるしにかぶれたり虫に刺されたり大雨、大雪にあってとぬい面もあります。けれどそれを体全体、五感をフルに使って日々を過ごすことで子供はいろいろなことを乗り越えて、仲間と協力し合い、成長していくのだと思います。 幼稚園に自然の中で過ごすことは成長していく過程でも大切なこと(A) だと思っています。自然には虫や花や草やキノコや冬の雪も雨もすべてがあり、それは恵みであり親しむべき存在です。主に親しむことで情緒が安定し感情が豊かになります。 キノコに詳しくなり(A) 梅干しやみそ汁や海苔巻き、餅など伝統のものを好きになった。 両親ともに北海道出身ではないので、 北海道の四季の動植物の知識がついた(A) 。 親も子どもとって親子にしたり(A) 。自然に触れる機会がたくさんある。 休日に、 山菜やキノコ採りに行くようになった(A) 。						
その他	食の安全のこと、環境のこと、地域活動への参加など、実践できるようになった(A) 。 五感をフルに使うので小さなことに大喜びします。 親と一緒に新鮮に食を覚えることで独自の発達を育てることができています(B) 。						

下線太字部分は、自然幼稚園での活動を通じた子どもの成長、または保護者の意識・行動に及ぼす効果について確認できた部分を示す

体 客体の関連)は、記述内容から明確に確認できた項目は一部にとどまったものの、上記のような意識形成、行為発生、能力向上といった一連の波及効果の形成過程においては、自然幼稚園における子どもを中心とした先生、保護者同士の密接な関わり合いが一定の効果をもたらしたと推察される。

(2)「手稲アウトドア・クラブ」の分析結果

「手稲アウトドア・クラブ」は、学校週5日制が導入された2001年4月に発足した任意団体であり、主に小学4年～6年の児童を対象として自然観察を中心とする野外活動体験を目的に活動している。毎月1回、年間12回の活動を通じて手稲山とその周辺地域の植物、動物のほか鉱物、地質などあらゆる自然を参加する子どもが五感を通して観察することとし、世話役の大人たちが年間スケジュールを組んだ上で活動の1週間前に下見を行い、当日の観察対象を資料として配付して活動を行っている。小学3年生以下の参加者は保護者の同伴が義務づけられており、また4年生以上であっても希望すれば保護者が参加することも可能である。本研究では手稲アウトドア・クラブへの児童の参加をきっかけとして、子どもにどのような変化があり、またこれに影響されて保護者が意識面や活動以外の行動面(家族でのレクリエーション等)にどのような変化があったのか検証した。

2013年度参加した児童の保護者を対象にアンケート調査を行い、対象者23名中13名から有効回答を得た(有効回答率56.5%)。データを集計・分析した結果、活動参加後の子どもの興味関心の変化として「生き物への興味・関心が以前より高まった」で10名の保護者が子どもの変化を実感しており、身近な自然環境に対する関心の高まりが見られた(図-5)。また「植物や虫の名前を覚えて言えるようになった」で10名、「食べられる山菜、木の実に詳しくなった」で8名、「植物図鑑、動物図鑑などを読むようになった」で6名の子どもが回答し、活動を通じた自然に関する知識の深化、学習意欲の向上が見られた。また「草笛、笹舟などをつくれるようになった」に5名の子どもが回答し、自然を改変して遊び道具をつくる技能の取得につながっていた。一方で保護者への影響では、「子どもと一緒に植物、動物のことを学習するようになった」が5名に見られ、子どもの自然への興味関心の高まりが親子での学習機会創出につながっていた(図-6)。また「子どもと一緒に近隣の山や川に遊びに行く機会が増えた」が3名に、「子どもと一緒にキャンプに出かける機会が増えた」が2名に見られ、活動への参加が家族でのレクリエーション活動の活性化につながるケースが見られた。また「その他」の回答として「親子の会話に「オニグルミ」「トリカブト」「コウイカ」など正しい生物の名前が出てくるようになった」や、保護者が一緒に参加しているケースでは「同じ体験をして植物や動物の話題が出るようになった」など、活動参加を共有することを通じて親子間のコミュニケーションが深まる事例が見られるなど、活動参加による波及効果が明らかとなった(表-2)。

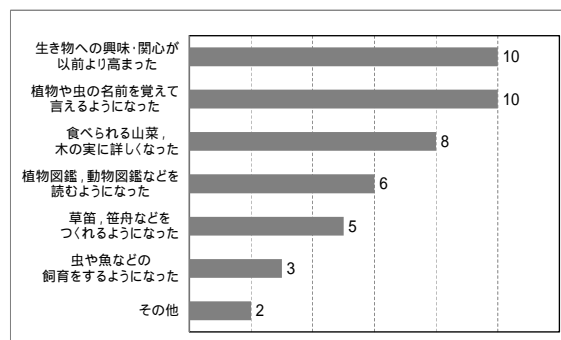


図-5 参加後の子どもの興味関心の変化(複数回答)

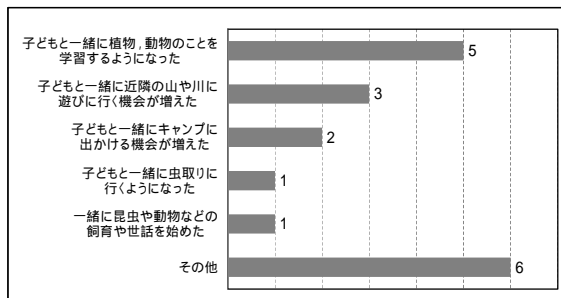


図-6 参加後の家庭生活の変化(複数回答)

表-2 参加後の家庭生活の変化(その他)

その他記述内容
「飼育物や水槽が増えた」
「親子の会話に「オニグルミ」「トリカブト」「コウイカ」など正しい生物の名前が出てくるようになった」
「自然をもっと意識するようになった」
「同じ体験をして植物や動物の話題が出るようになった」
「山・海・キャンプなどの活動が拡大した」
「自然についての会話が増えた」

なった」や、保護者が一緒に参加しているケースでは「同じ体験をして植物や動物の話題が出るようになった」など、活動参加を共有することを通じて親子間のコミュニケーションが深まる事例が見られるなど、活動参加による波及効果が明らかとなった(表-2)。

(3)「モモンガくらぶ」の分析結果

NPO 法人登別自然活動支援組織モモンガくらぶ(以下「モモンガくらぶ」)は2005年に設立され、登別市ネイチャーセンターふおれすと鉱山(自然体験学習施設)を拠点として自然活動を展開する組織である。定款第1条には「この法人は、自然活動を通じて人と人、人と自然のふれあいを促進し、子どもから大人まですべての人が、豊かな自然を五感で感じ、遊びの中で感動し、自然の大切さを学び、自然の価値と自然を大切にすることを育むことを通じ、豊かな人間性を創造し、自然と共生できる暮らしとまちづくりに寄与することを目的とする」とある。モモンガくらぶは多種多様な自然体験プログラムを年間を通して提供・実施しているが、本研究ではこのうち子どもを対象とした活動参加者の保護者を対象としたアンケート調査を実施した。調査の結果、対象者33名中11名から有効回答が得られた(有効回答率33.3%)。前出の

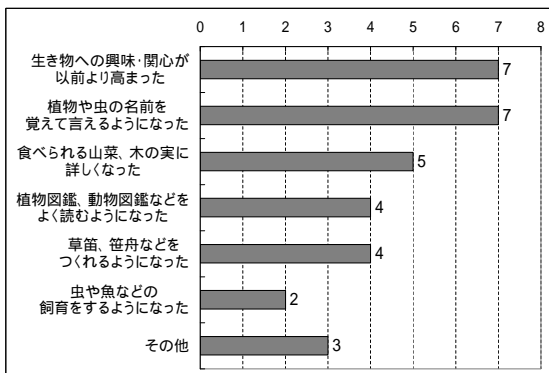


図 - 7 参加後の子どもの興味関心の変化（複数回答）

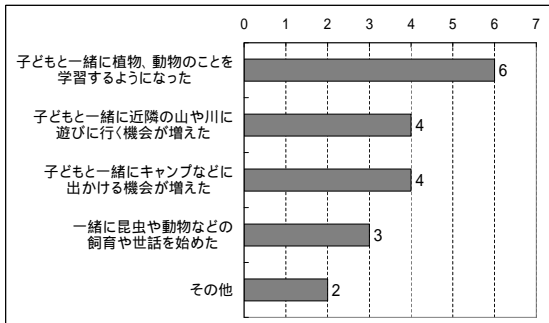


図 - 8 参加後の家庭生活の変化（複数回答）

表 - 3 参加後の家庭生活の変化（その他）

その他記述項目
「今まであまり関心が無かった木の実のことなど、教えてくれるようになった」
「子どもから植物の名前や生態、火のおこし方などについて教えてもらった」

「手稲アウトドア・クラブ」を対象に行った質問項目と同一の内容について調査・分析した結果、「生き物への興味・関心が以前より高まった」が7名に、「植物や虫の名前を覚えて言えるようになった」が7名に、「食べられる山菜、木の実に詳しくなった」が5名に、「植物図鑑、動物図鑑などをよく読むようになった」が4名に、「草笛、笹舟などをつくれるようになった」が4名に見られ、参加を通じた子どもの興味関心の変化としてほぼ同様の結果が得られた（図 - 7）。一方で保護者への影響として家庭での生活変化では、「子どもと一緒に植物、動物のことを学習するようになった」が6名に、「子どもと一緒に近隣の山や川に遊びに行く機会が増えた」が4名に、「子どもと一緒にキャンプなどに出かける機会が増えた」が4名に見られたことに加え、「一緒に昆虫や動物などの飼育や世話を始めた」も3名に見られるなど、前出の図 - 6 と比較して子どもの活動参加による保護者への波及効果がやや高い傾向が見られた（図 - 8）。また参加後の家庭生活の変化（その他）として「今まであまり関心が無かった木の実のことなど、教えてくれるようになった」、「植物の名前や生態、火のおこし方などについて教えてもらった」など、子どもが参加を通じて取得した自然に関する知識の深化、体験を通して学んだ技術が、家

庭内で親世代に追体験されているケースが見られるなど、その波及効果が明らかとなった（表 - 3）。

（4）まとめ

本研究は、こどもの自然体験活動が親の余暇活動の充実等に影響を与えているのではないかという仮説のもと、二世帯への調査を通じてこどもの自然体験活動が親にどのような影響を与えたのかについて意識面、行動面の両面から検証を試みた。研究の結果、調査対象事例のいずれにおいても子どもの自然体験活動が保護者の自然に関する知識の涵養、家庭でのレクリエーション活動の活性化等に一定の波及効果をもたらしていることが明らかとなった。このような保護者への波及効果は、家族でのレクリエーション活動の向上等につながりうることから、子どものみならず保護者の興味・関心を喚起したり、参加意欲をかき立てたりするプログラムの充実が、今後の自然体験活動の発展に必要とされているのではないかと考えられた。

加えて、東日本大震災以後、各地で自然災害に備える事業・活動が展開されているが、国立青少年教育振興機構の調査によれば「自分で判断し、行動を起こす力を植え付ける自然体験プログラムが防災教育に有効」である点が指摘されている。自然体験活動が個人や保護者の余暇活動の充実にとどまらず、災害時の避難行動や避難生活における生活の質の確保に必要な知識・技能の育成に高い効果があることも期待されている。よって、本研究で得られた知見を踏まえた上で、今後は防災教育という観点から自然体験活動の波及効果について検証していくことが研究のさらなる発展に必要であると考えられる。

<引用文献>

国立青少年教育振興機構「防災教育の観点に立った青少年の体験活動プログラムの調査研究 平成23年度文部科学省委託事業」2012、
http://www.niye.go.jp/kenkyu_houkoku/contents/detail/i/68/

5. 主な発表論文

〔雑誌論文〕(計2件)

椎野亜紀夫：市街地及び近郊地域における児童の理想とする自然環境のあり方に関する考察、ランドスケープ研究論文集31、査読有、615-620（2013）

椎野亜紀夫：自然幼稚園における野外活動実態と入園後の保護者への影響に関する事例研究、ランドスケープ研究(オンライン論文集)、査読有、Vol.7、48-51（2014）

〔学会発表〕(計1件)

椎野亜紀夫：北海道における自然幼稚園の

〔その他〕

ホームページ等

<http://www1.hus.ac.jp/~shiino>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

椎野 亜紀夫 (SHIINO, Akio)

北海道科学大学工学部・教授

研究者番号：00364240

(2) 研究分担者

(なし)

(3) 連携研究者

岡村 俊邦 (OKAMURA, Toshikuni)

北海道科学大学空間創造学部・教授

研究者番号：50233367

久保 勝裕 (KUBO, Katsuhiro)

北海道科学大学工学部・教授

研究者番号：90329136